

入選 中学生の部

親切ってなんだろう

静岡市立城内中学校 二年

石川 あんず

中学二年生の六月ごろ、私は午前中の部活が終わり、家に帰るために友達と電車に乗っていました。発車する少し前に、私のとなりにおじいさんが座りました。私は、知らない人のとなりに座っているのは、あまりいい気持ちではなく、それもとなりに座ったのはおじいさんだったので、

(あーやだな。)

と心の中で思っていました。

発車して少したった時、おじいさんがチョコレートを食べようとして、チョコレートの袋を開けようとしていました。

けれど、おじいさんはずうっと袋をぐちゃぐちゃしていたので、

(どうしたんだろう、早く開ければいいのに。)

と思いながら少し見ていたら、おじいさんは、手が不自由だったらしく、左手がうごいてなくてうまく袋を持ってないことに気づきました。

それを見て私は思い出しました。小学校の先生から、

「人は支えられながら生きていくんだよ、字を見てごらん、人という字は一画ずつたがいを支えあって出来てるのだから、人が困っていたらたすけてあげてね。」

と言われた事を。だから私は勇気を出して、「開けますか?」

と聞きました。おじいさんは、口も不自由で上手に話せない様子でしたが、

「大丈夫。」

と一言そう言ってまた、袋を自分で開けようとしていました。

私は、
(なんで頼まないんだろう、頼んだ方が早いのに。)

と思いながら、おじいさんの様子を見ていました。

私の思った通り、袋はぐちゃぐちゃになるばかりで一ミリの切れ目も入ってなく、私はもう一度、

「開けますよ?」

と聞きましたが、おじいさんはさっきと同じで、

「大丈夫。」

と言いました。少したってから、「これもリハビリの一つ。人に頼んだら左手をもっと使えなくなってしまうんだ。」

と言いました。

私は自分が親切心から言った言葉だから、きつと相手も言われてたすかるなと思ってくれると思いきや、

そして、おじいさんはやつと袋を開けられ、チョコレートを食べていました。私はついそれを見て、

「やった!」

と言ってしまいました。それを聞いておじいさんはニコツとしました。

そして、駅に着いて電車を降りようと友達と立ち上がった時におじいさんがハッキリ

リした声で、
「ありがとうございます。」

と言ってくれました。

私はその言葉がすごくうれしかったです。家に帰って、親切ってなんだろうと思
い辞書でしらべたら『相手の身になって尽
くすこと。』と書かれていて私はその時、

(見守る事も親切かな。)

と思いました。親切にはきつといういろいろ
種類があると思います。

そして、その共通点は人の事を思う気持
ちだと私は思いました。

まだまだ

富士市立大淵中学校 二年

上杉 朋花

今年の八月、私は小中学生国際交流体験
団に参加し、オーストラリアを訪れました。

私がお世話になった町は道路や店の中な
どによく、ゴミが捨てられていました。ホー
ムステイ中にマザーは、私を公園に連れて

いってくれました。オーストラリアは水が
豊富ではなく、各家庭でタンクに雨水をた
めて使用していました。なので、日本のよ
うに水道水を飲むことができません。そこ
で、その家庭は公園の井戸のようなところ
で、飲み水をくんでいました。

「ずっと前から私達は、ここで水をくんで
いるの。でも、最近はここで遊ぶ人が
増えてきたのよ。」

マザーは教えてくれました。公園を案内し
てくれている途中、私は数本のペットボト
ルのゴミを見つけました。

(せっかくこんなに綺麗な公園なのに、ゴ
ミがあるなんて残念だな。)

思いながら、無意識にそのゴミを拾って
近くのゴミ箱に捨てていました。するとマ
ザーが言いました。

「素晴らしい！日本人はゴミを見つけたら
拾うの？」

すると一緒にいたホストスチューデント
は、真似をしてゴミを拾っていました。マ
ザーに聞かれたとき、私は「はい」と答え
ることができませんでした。日本は、外国

から見たら綺麗な国なのかもしれません。
中にはゴミを見つけたらすぐに拾う人もい
ます。でも反対にポイ捨てる人もいます。

今回の出来事を通して、私はホームステ
イ先の人達に『自分のゴミではなくても、
見つけたら拾う』ということを伝え、『日
本もまだまだ、完全に綺麗な国ではない。
私達の国も、暮らしている人々全員が意識
を持たなければならぬ』ということを感じ
させられました。同時に、資源をもっと
大切にしなければならぬと思いました。
例えば、先ほども述べたようにオーストラ
リアは水を大切にします。しかし日本はど
うでしょう。出しっぱなしにしたり、無駄
使いをしたり。オーストラリアの人々の水
の使い方を見た時、私は日本人として恥ず
かしくなりました。もっと水を大切に使お
うと思いました。

私がホームステイをして、一番強く思っ
たことは、『私達はまだまだ進歩できる』
ということです。オーストラリアやほかの
国を見習ったり、時には反面教師にしたり。
そうすることで、日々前進していきたいで

す。誰も気付かなくても、小さな親切から
少しずつ行っていくことで。

私のうけた小さな親切

富士市立田子浦中学校 一年

漆畑 凧紗

私のうけた親切で、本当にささいな出来
事なのに心に残っているものがあります。

それは、部活動のモップ掃除でうけた親
切です。

私が入っている卓球部では、毎回モップ
掃除をするのですが、そのモップの中で一
つだけ、黄色くて、やりにくいモップがあ
ります。そのモップは、最後にモップを取
りに来た人がやる事に、自然となっていま
した。

ある日、私と、ある子がモップを取りに
行くのが最後になってしまいました。する
とその子は、私の前にスツと出て普通の白
いモップを取りました。なので私は、黄色
のモップを取ろうとしました。するとその

子は、

「はい。」

とあたり前のように私に白いモップを渡し
てくれたのです。その動きが、あまりにも
自然だったので、「ありがとう。」とさえ言
う事が出来ませんでした。後になってから、
ありがとう、となぜ言わなかったのだろう。
と後悔しました。

それから私は、黄色いモップをさげずに、
並び順でモップを取る事が出来ました。
それと、「ありがとう。」と言う事も大切に
しました。

それでもやっぱり、黄色いモップはさげ
られていました。

すると一人の子が何も言わずに黄色い
モップを取ると、いろいろなやり方を試し
始めました。すると、

「押すより引いた方がやりやすいよ！」
と明るく笑って言ったのです。さらに、

「別に、すぐ終るよ！」
と言い、その子は毎日黄色いモップをやり
始めました。

それからは、少しずつですが黄色いモツ

プが最後まで残る事が減っていききました。

私は、すごいと思いました。見習おうと
思いました。だから私も、黄色いモップを
使い始めました。

すると、みんなが並び順で取るようにな
っていったのです。そして、最後に残る
という事が無くなりました。

これは、本当にすごい事だと思えます。
小さな親切が少しずつ大きくなったので
す。

ささいな出来事かもしれないけれど、と
ても心に残りました。

こういう小さな親切が、とても大きな奇
跡を起こすのだと思いました。

だから私も、小さな親切を大切にしてい
きたいです。

これからの日本に思うこと

静岡市立豊田中学校 二年

風岡 萌音

三年後、東京でオリンピックが開催され、世界中から沢山のゲストが集まります。世界中が同じルールの中で熱くなれる、すばらしい大会だと思えます。私の住む静岡で行われる競技もあると知り、オリンピックをより身近に感じ始めました。

しかし最近、宗教、民族間での争いや、テロ等のニュースをよく耳にします。それらは一部の人によるもので、ほとんどの人は無関係ということも知りました。

数年前まで、近所にバングラデシユ人の家族がいました。ご主人は、日本の大学を卒業し、いつか母国が豊かになるように日本で知識をつけたいと、奥さんを母国から呼び、日本で出産したそうです。奥さん(Nさん)は、日本語が不十分で、知り合いも少なく、日中は子供と二人でとても淋しかったそうです。その理由として、母国の

服を着て、浅黒い肌だから。色が白ければ、もっと話しかけてくれるはずだ、とよく話してくれました。

Nさんとの会話は、主に日本語でしたが、英語を混ぜたりもして、会話が弾みましたが、平仮名と片仮名は読み書きできましたが、漢字はほとんどできませんでした。

Nさんの子供が小学校に入学する年、私の母はランドセルを用意してない事を知り、心配して家を訪ねると、籠の中は入学に関する書類でいっぱいでした。内容が分からず、困っていたそうです。それらを一つずつ説明し、Nさんは母国語でメモを取り、細かい手続きが間に合いました。

バングラデシユでは、日本のように細かいやりとりをする習慣がなく、日本の複雑なシステムや気配りに驚いていました。

Nさんは、日本では当たり前前のシステムが分からなかったそうです。母は、もう少し早く気付ければよかったと、悔やんでいました。

私は、なぜサポートできる人や物がなかったのかという事と、「白ければ」とい

う言葉に、辛く悲しい気持ちになりました。

Nさん達は、イスラム教の事も教えてくれました。私達と違って、神様はアッラーだけで、でも色々な人が沢山の神様に愛されていると教えてくれました。私達は、クリスマス等の他の宗教のイベントも楽しんでいきます。それが日本のスタイル、と話してくれました。

オリンピックには、様々な国から多くの方が訪れます。肌の色、国、文化、宗教も様々ですが、全ての人が、日本は素敵な国、おもてなし文化の国、また日本に來たいと思えるよう、三年間を過ごしていきたいです。

また、私達も世界を知り、ホストとしての役割を果たせるように、柔軟な考え、知識、そして広い視野をもてるようにしていきたいと思えます。

給食当番の 僕を支えたありがとう

浜松市立清竜中学校 二年

加藤 優音

僕は、ある日の昼、給食当番で忙しく、自分の給食の用意ができず、四時間目の授業道具を机に置いたままにしてしまった。内心、

(どうしよう。僕の給食、作ってもらうことを頼むの忘れていた。)

と思い、あせった。給食を作ってもらう人がいなければ、作ってもらえないし、授業道具が机いっぱいに広げられていて、給食が置けないからだ。

(皆には、迷わくがかるけれど、早く済ませて、急いで作るしかない。)

と思い、できるだけ給食室から教室までの移動を早くした。教室に入ると、皆が机の上にナプキンをして、「準備完了。」という顔で待っているように思えた。

(あれ、何か違和感がある。)

と思い、僕の机を見た。すると、さっきの

机がうそのように、授業道具が片づいていて、給食用のナプキンがしかれていた。

(これは、奇跡だろうか?)

と目をこらして見たが、現実だった。嬉しいと言うより驚きの方が大きかった。そして、給食当番の仕事を済ませ、僕の給食を作るために急いで席に戻った。すると、また奇跡だろうか?と疑う出来事が起こった。なんと、机の上に給食が置いてあったのだ。再び目をこらして見ると、それも現実であった。給食用ナプキンの用意と、給食の用意が知らないうちにされていたことに対し、驚いた。これをやってくれた人に感謝しようと思い、班の皆に、この給食を誰が用意してくれたのかを知っているかを尋ねた。でも、誰も知っている人はいなかった。僕はとても残念に思った。

(もしかして、友達だったりして。)

と思って尋ねてみたが、やはり、用意してくれた人はいなかった。僕はなぞめいて、昼休み中ずっと考えていた。

(もし、僕が給食を用意してくれた人の立場だったら、必ず相手に伝えるのに。

でも、親切心とは、自分が相手に対して行ったことをわざわざ伝えず、自然に湧き出て、それを実行することなのではないか。)

僕はそう思い、親切心を示してくれた子を探すのをやめた。

僕は、僕に小さな親切を、気づかないうちにしてくれた子のことは知ることができなかったけれど、その子の親切な心が、どれほど大きいのか、知ることができた。その子はきつと、いつでも親切で、優しく周りに接することができる人なのだろう、と確信した。そして僕も、その子を見習い、誰かにみせる親切ではなく、何げない小さな親切を大切にしていこう、と思うことができた。

いちやりばちよーでー

静岡大学教育学部附属島田中学校 一年

北村 一葉

『いちやりばちよーでー』

この言葉は沖縄の方言で、一度会ったらみな兄弟という意味だ。私は、小学校一年生のときに父の転勤のため、沖縄の小学校に転校した。友達ができるのか、学校生活に慣れることができるのか、不安な気持ちでいっぱいだった。

実際に学校へ行くと、本土からの転校生はめずらしいらしく、クラスのみんなが、「どこから来たの?」「静岡ってどこ?」

と、話し掛けてくれてとてもうれしかった。休み時間には、

「一緒に遊ぼう。」

「図書館で一緒に本を読もう。」

と、さそってくれた。放課後も声を掛けてくれ、一緒に遊ぶようになった。学校生活にすぐに慣れることができ、友達もできた。

そして、不安も無くなっていった。

小学校五年生の頃、総合学習で沖縄の方言について学んでいるとき、『いちやりばちよーでー』という言葉を知った。誰でも会えたことをうれしく思い、兄弟のように仲良くしようという意味で、一年生のとき、みんなに親切にしてもらったことが重なった。

その後も何度か転校した私は、やはり毎回不安できんちょうしていたが、どの街に行ってもクラスのみんなは『いちやりばちよーでー』の言葉のように声を掛けてくれ、温かく迎えてくれた。

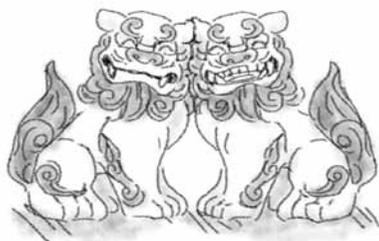
私は、今までの学校生活で何度か転校生を迎えたことがある。どの転校生も不安からか、とてもきんちょうしているように見えた。そんな姿を見た私は、自分の番だと思ひ、転校生に、

「一緒に帰ろう。」

と、声を掛けた。少しドキドキしたけれどもうれしそうにしている顔を見て、声を掛けて良かったと感じた。それに、少しは不安な気持ちを無くすことができたかと思う。

私が転校してきて、声を掛けてくれた友人たちは、私が実際に声を掛けてドキドキしたときと同じように、ドキドキして勇気を出して言ってくれたのだと思う。けれど、たったひと言でもふた言でも声を掛けてくれるだけでうれしく、不安な気持ちは少し無くなる。

『いちやりばちよーでー』は沖縄の人の親切な気質から生まれたそうだ。実際に沖縄で生活をしていて、横とのつながりを強く感じ、困っている人の力になってくれた。私はそんな親切心でいっぱい沖縄の人々を見習い、今後も小さな出会いも大きな出会いも、親切心を忘れずに大切にしていきたい。



私の出来なかつた親切

静岡県西遠女子学園中学校 三年

近藤 はづき

私の家の前の家は、住んでいる人が入院をしているため、月に一度くらい、他の所に暮らす家族が見舞いに来た時に、一泊して帰るといふ家だ。

ある日、その家の庭を掃除する人がいた。その家のとなりに住むおじいさんだ。

月に一度、一晩だけの滞在なので、庭は荒れ放題だ。草木は伸び、自転車はたおれたままだ。そのような状態なことや、その日のごみ収集日だったこともあるが、なかなかできることではないな。と感心した。ほうきで落ち葉をかき集めて、大きなごみ袋へ入れるという作業をくり返し、落ち葉のない状態にしたのだ。私も気にはなっていたが、他の人の家へ無断で入っているのか、いくらごみとは分かっているか、勝手に掃除してもいいものか。と考えていた。でも、おじいさんの掃除している姿を見て、

そのような考えは必要なかったと思った。いつも住んでいるわけではない家の人が、庭の手入れまで行き届かないのは当然で、私を感じた気持ちと共に、感謝されるのではないかと考えた。

別の日、おじいさんは大きく成長した木が、自分の家の庭先まで伸びていることに気づき、困っていた。枝を少し切りたいが、掃除の時のように、許可なく切つて良いのかと悩んでいるように見えた。

しばらくすると、おじいさんの家の庭先に伸びた枝を何本か切り落としていた。後日、留守にしていた家の人が戻つて来た。木を切つたおじいさんは早速、勝手に木を切つたことを謝罪したそう。すると、逆に木を切つてくれたことを感謝され、木を伸ばし放題にしていた事を謝られたそう。最初に感謝の言葉を聞く事ができて、おじいさんも安心しただろうし、木を切つてもらつた側の人も申し訳ない気持ちと、ありがたい気持ちと両方持つただろうな。と思つた。

小さな親切をした人、受けた人、それぞ

れが清々しい気持ちになつただろう。やつた側は、感謝してもらおうと思つて掃除や木を切つたりした訳ではないのに感謝され、やつてもらつた側は、きれいにしてもらつていないことを知らないで家に戻つてみたら、きれいになつていたことに恐縮しつ、うれしさが大きかつたはずだ。

そのような様子を知り、私は掃除する事を迷つていたことが恥ずかしいと思えた。親切というのは、困っている人を助けてあげることだ、と改めて感じたからだ。毎日住んでいるのではないから、自宅がどんな様子かわからないし、もしどんな状態になつていくか気になつていても、すぐに駆けつけることができないのだ。

少しでも気がついたことがあれば、行動に移す。これは、とても大切な事だとよくわかるおじいさんの親切だった。

私がおもらった親切

長泉町立長泉中学校 二年

坂本 野花

「ない。ないない。」

学校についてかばんをあけた私は、筆箱がないことに気がついて焦った。朝、確にかばんに入れたはずなのに、学校についてたなくなっていたのだ。何度探しても、やっぱりない。そういえば、学校にくる途中、かばんのふたが開いている事に気づいて、友達に閉めてもらったんだ。もしかしら、その時に落ちたのかもしれない……。帰りに探せば見つかるだろう。その時の私は、そう思っていた。

でも、帰り道に、いくらキョロキョロ探しても、筆箱は落ちていなかった。私は、何もする気がしないほどガツカリした。

二年間使っていた筆箱。その中には、友達がくれた誕生日プレゼントのシャープペンや、もう売っていない色ペンなど、大切

な宝物がいっぱいあった。筆箱自体、自分のお小遣いで初めて買った、思い入れのあるものだ。私にとっては、お金を落とすよりもシヨックな出来事だった。

次の日、登校する時に、もう一度よく探してみたけれど、やっぱり見つからない。落とす物で届いていないか先生にも聞いてみたが、届いていなかった。次の日には見つかるんじゃないかと期待していた気持ちが、すっかりしぼんでしまった。もしかしたら、このまま見つからないかもしれない。私の心は不安でいっぱいになった。

次の日も、また次の日も、先生に聞いたがやっぱり届いていない。もう新しい文房具を買わなければならない。と、思っていた五日目に、なんと筆箱が私の所に戻ってきた。

筆箱は、やっぱり道に落ちていたらしい。それを見つけた人が、近くの小学校に届けてくれたそう。小学校には持ち主がいなかった。中学校に連絡が来た。その話を聞いた別のクラスの友達が、教えてくれたのだ。

見つかったと聞いた時は、ただただびっくりした。小学校に取り行って実際に手に取って初めて、飛び上がりたほど嬉しい気持ちがこみ上げてきた。

最初に拾ってわざわざ小学校に届けてくれた人、小学校に持ち主がいないので、中学校にも連絡してくれた人、その話を聞いて教えてくれた友達。色々な人の親切が重なって、私の筆箱は戻ってきた。最初に拾ってくれた人に直接お礼を言うことはできなかったけれど、感謝の気持ちでいっぱい。

今までの私は道になにか落ちていても、ただ通りすぎるだけだった。でもこれからは、きちんと拾って、持ち主が見つかりそうな場所に届けようと思う。もしかしら、その小さな親切の 릴레이 が、いつか筆箱を拾ってくれた人に届くかもしれない。本当にそうならいいなと思う。

気づかないけど大切な事

静岡市立大里中学校 二年

佐野 星

毎朝三十分かけて学校に行く。みんなが登校するのは八時ごろ。私が登校するのは七時。学校に着いてからは、練習をしてから教室に向かう。これが私の一日の始まり。

私は中学校へ入学し、野球部に入学してからほぼ毎日同じ時間に起き、同じ時間に登校している。二年生になり、こんな生活があたり前になったとはいえ、みんなと同じような時間にゆっくり登校したい、と思うことも少なくはない。週末は特に疲れがたまると足取りが重く、自然と目線も下がってしまう。そんな中で私は、一人のおばあさんと会う事を楽しみにしている。「毎朝早くて大変ねえ。」

私にその声をかけてくれたのは、小柄でどこか暖かい雰囲気に含まれた一人のおばあさんだった。そのおばあさんはいつも通る道で会う人としか思っていなかったが、毎

朝顔を合わせていたせいか、知らない人という感覚は全く無く、自然と会話ができたことを覚えていた。私が、

「部活の練習があるんです。」

と言うと、

「毎朝あいさつをしてくれてすごく気持ち良かったよ。頑張っているのね。」

と、おばあさんは優しい笑顔でそう言ってくれた。私は正直すごく驚いた。何気なく毎日していたあいさつを「気持ちが良い」と言われたのは初めてで、すごくうれしかった。確かに、普段の生活からあいさつをすることを心がけてはいたものの、最近はそのあたり前になり、あまり意識をしたりはしていなかった。そんな時におばあさんが言ってくれたこの言葉は、私の気持ちを明るくしてくれた。

その日からは、おばあさんに会って話をするのが日課となり、私の楽しみにもなった。いつもしていたあいさつも、今までより明るく元気なあいさつに変わったと思う。おばあさんは私の部活のことも応援してくれていて、本当に良い人だな。と会う

たびに感じる。毎朝会うだけの人が私にとって大切な人になり、私の心を温めてくれる人になった。

「あいさつをする」それはとても簡単で、誰にでもできることながら、人と人をつなぐ大切なことであると思う。あいさつなんてしようと思えばどうにでもできるし、「あいさつの質」を決めるのは自分自身だ。あいさつを何気なくするのか、相手に伝えるあいさつをするのかは人それぞれだけれど、私は「あいさつ」をするのは、誰にでもできる一番身近な小さな親切だと思おう。

通じない相手

袋井市立浅羽中学校 三年

鈴木 葉奈

これは二年前、私が東京に行ったときの話だ。人であふれかえる渋谷スクランブル交差点にその人はいた。金髪で青くすきとおった目、高い鼻、みるからに日本人では

なく外国人だった。その人は東京スカイツリーのパンフレットを持ちながら、人混みの真ん中でおどおどしていた。どうやら地図にはのっているものの、現在地が分からなかったらしい。絶対困っている。私も私は助けに行くことが出来なかった。その人は英語で何度も、

「すみません、すみません。」

と周りに言って助けを求めていた。日本語がまったく話せないらしい。英語しか通じない相手に、英語で話し説明するとなると自信が持てなかった。もう少しすれば、きっと英語が話せるだれかがその人を助けてくれるだろう。という根拠のない推測で、私は行ってみようかな、とさえ思わなかった。

その人からすれば、みんなみてみぬふりをしてるんだな、と思ったかもしれない。あるいは、助けにきてくれる人なんて誰もいないな、とあきらめかけていたかもしれない。するとその時、その人に声をかけた女性がいた。日本人の女性だった。私は、あの人は英語得意ですごいな。と思っていた。しかし、少し近づいてみておどろい

た。女性は日本語で話しかけていた。ちょくちょく英単語は入れるものの、ほとんどが日本語で、迷っていたその人もうっすら理解しているようだった。日本語は分からないけど、女性の助けてあげたいという思いが伝わったのだと思う。最後には二人とも笑顔になっていた。行き方が分かったらしく、スカイツリーの方へスキップしていく外国人を見て、あの女性は言葉の壁をこえたんだ。と思った。

私は、外国人を助ける助けがないではなく、どうせ助けることが出来ないんだと決めつけ、一歩ふみだそうとしなかった。助けたいと思いい、行動にうつした女性は私とは少しというかだいぶ違った。自分に自信がなくても言葉の壁があっても、助けたいという思いを胸に一歩をふみだしたのだ。そう簡単にまね出来ることではないと思う。

助けた女性を見て、私はかっこいいと思った。自分とはあかの他人で言葉も通じないのに、必死に伝えようとしている姿に胸をうたれたのだ。私はこの時、迷った人を助けることが出来なかった。でも、今の

私なら出来ると思う。いや、出来る。出来るんだ。本当の親切は、心で表すものだと教えられたからだ。たとえ自信がなくても、一歩ふみだす勇氣さえあれば助けることが出来る。そう女性から学んだのだ。

「伝えよう」で乗り越える壁

静岡市立豊田中学校 三年

鈴木 来実

「ありがとう」かつての私はこのたった五文字を、素直に言えなかった。何度も、何度も、感謝すべきことはあったのに言えなかった。でも、今の私なら、その壁を乗り越えて素直に言える。胸を張って、
[「Thank you」と。]

私が小学校一年生の頃、父がある人と友達になった。彼女は、ジェニーというアメリカ人で、父の職場に赴任してきた人だった。ジェニーは、私たちの家によく夕飯を食べに来るようになった。初めの頃の私は、「外国人は緊張するな。英語も話せ

ないからな。」と、不安でいっぱいだった。でも、そんな私に、ジェニーは何とか話しかけようとしてくれた。日本語も満足に話せないのに、一緒にたくさんゲームをしてくれて、一緒にたくさん笑ってくれた。そして、ジェニーの小さな気遣いや親切心が、私をだんだん笑顔にしてくれた。ジェニーは、家に来る回数を重ねるごとに、日本語も覚えていき、私はジェニーが来るのが楽しみになった。

数年後、アメリカに帰国したジェニーが、私たち家族のことを取り上げたコラムを書いてくれた。そこには、日本に来たばかりの頃、孤独の恐怖があったこと。でも、父に何度も夕飯に誘ってもらい、私たちと仲よくできたこと。それによって、いつの間にか孤独を感じるものがなくなったこと。最後には、「私にとって一番大切な時間は、鈴木家の皆さんと過ごす時間です。」と、書かれていた。それを読んだ後、そのページが一滴の涙で濡れた。私はまだ、ジェニーの気遣いや親切心に対して、「ありがとう」と言っていない。自分の気持ちを十分に伝

えられなかった悔しさと、申し訳ない気持ちで、胸が熱くなった。

そんなある日、私の後悔を晴らすチャンスが訪れた。アメリカから日本にジェニーが遊びに来る、という朗報を父から聞いたのだ。私はその言葉に、心を躍らせた。ジェニーはアメリカに帰ってから、日本語を使わない生活になり、日本語を忘れてしまったようだ。だから私は、習った英語を最大限使い、会話やゲームをした。そして別れ際には、かつて言えなかった、「Thank you」が言えた。お互いに日本語も英語も完璧ではないけれど、伝えようとすることで、相手が理解しようとし、コミュニケーションができるのだ。コミュニケーションに、言語の壁は存在しない。

今、私の住んでいるマンションにも、外国人の方がいる。まだ、私は挨拶しかしたことがない。でも、たとえ言語の壁があったとしても、私の拙い語学力で伝える勇気があれば、その壁は決して高くはない。多くの人のために、言語の壁は避けて通りたいもの。でも、それをあえて避けないことで、相手

も言語の壁を壊してくれ、そこには自分を通るべき新たな道が待っている。大切なのは、伝えようとする気持ち。理解しようとする気持ち。多くの人がこの気持ちを持ち続けられれば、世界中が愛と平和と笑顔に包まれることになるだろう。私は、そんな世界になることを願っている。

車イス

静岡市立清水第七中学校 三年

滝田 七彩

私が電車で出かけるときに、駅のホームで見たことです。

ホームは、午前中だということもあり、とても混んでいました。そんな中、車イスの男性と駅員さんがホームへやって来ました。人が多かったこともあり、車イスにぶつかって歩いていく人も少なくありませんでした。

電車が来てドアが開くと、駅員さんは素早く小さなスロープを取り付けました。男

性は、

「ありがとうございます。」

と言いながらも、周りの目を気にして、申し訳なく思っているような表情をしているように見えました。急いでいる様子の人が、迷惑そうな顔をして通っていったからでしょう。実際に、車イスは場所をとってしまっていました。

その場面を見てから、その男性と同じ電車に乗り合わせた私は、「せっかくのお出かけなのに、気分が下がってしまったのではないかな。」と、少し心配になりながら、電車で揺られていました。

電車の中で、車イスの男性は端の方にいました。そこから見える窓からの景色を楽しんでいるような表情でした。電車の中では、ホームのようにせかせかしている雰囲気の人はいませんでした。人が次の駅から乗ってくるたびに、微妙に動いて、よけている男性を見て、男性の気づかいを感じました。中には、男性を気づかう乗客の姿も見られました。そういうことがあるたびに、表情が明るくなっていったと思います。

次々と変わっていく緑の景色を、とても穏やかな顔で見つめる男性を見て、私もほっこりとした気持ちになりました。

男性が降りる駅に着いたとき、また駅員さんが素早くスロープを取り付けました。今回はしっかり男性の顔を見ることができました。心の底から、

「ありがとうございます。」

と言った男性の顔です。きっと、最初の駅員さんへのお礼も、心の底からの笑顔を見せていたのだと思います。でも、誰でも周りの視線は気になるものです。だから、少し表情がくもっていたのでしょう。

いくら自分が急いでいても、車イスの人がいるからといって態度で表してはいけなと思います。車イスの人は、人の邪魔になりたくないわけではないと思います。私も急いでいるときに、目の前で小さい子たちがふざけ合っていて、嫌な顔をしてしまったことがあります。私は反省しました。この出来事を見て、他の人の迷惑になってしまったとしても、その人は迷惑になろう、だなんて考えていないことを知ったからで

す。自分だって、幼い頃はふざけていたはずです。これからは、相手の立場も考えたと思います。そして、駅員さんのように人を笑顔にできることをしたいです。

日本のマナー

静岡市立城内中学校 三年

土屋 愛

私の中学校では四十年も続く、カナダのヒューボイド校という学校との国際交流がある。そして昨年の冬、ヒューボイド校の生徒数十人が、私たちの中学校にやってきた。カナダからの生徒は毎年、城内中学校生の家にホームステイすることになって、私の友達がそれを引き受けることになったのだ。

そして、カナダの生徒たちが静岡に到着した翌日。私はホームステイを引き受けた友達と、毎朝一緒に登校しているため、カナダの子とも通学を共にすることになった。学校に着くまでの間、何て話し掛けよ

うか迷っていた時、

「クチャ。」

明らかにガムを噛んだ音が聞こえた。私たちはびっくりして顔を見合わせた。

(何でガムなんか食べているの!?)

と疑問に思っていると、友達はすかさずローレン(カナダの子)に話し掛けた。友達の発音が良くて、あまり聞き取れなかったが、

「ジャパニーズルール。」

という単語が耳に入ってきた。後から聞いたのだが、カナダや外国では学校でもガムを噛んでいいのだそうだ。ローレンは少し困った顔をしたが、

「オーケー。」

と言ってガムを包み紙で包んだ。私はこんな短い間に、外国との習慣の違いをありありと感じた。それを「日本にいるのだから」と、はつきりと伝えた友達がすごく誇らしくなった。

最近、たくさん外国人が日本を訪れている。そして独特な日本の伝統文化に、肌で触れている方も多いのではないだろうか。

か。そういう伝統文化もそうだが、日本のマナーにも是非触れるべきだと思う。そういう精神を伝えた友達に、私は「真の親切さ」を感じた。なぜならば、そう伝えることに勇気が必要だったと思ったからだ。外国の人に日本の習慣を理解し、実際にそうしてもらおうというのは、簡単なことではないだろう。それをすかさず促した友達は、やっぱりすごいと心から思う。

この出来事を通して、外国人にマナーを守らせるということも、日本の文化に触れることにつながると思った。今、世界的に日本人の「列に並ぶ」などのマナーが評価されている時代だ。それを自覚し、日本人として誇りをもって行動していきたい。また、日本のマナーを知ってもらえるように、またこのような出来事があつたら胸を張って伝えたい。それが外国人にとって「小さな親切」であると思うから。

落ちていた贈り物

静岡市立大里中学校 三年

戸塚 雅喜

道端で落とし物を見つけた時、あなたはどうするだろうか。全くの見ず知らずの人が持っていたものを、わざわざ拾って交番に持っていくには、多少の迷いがある。素通りをすることもできるのである。

ある日、私は下校中、道端にスマートフォンケースを見つけた。

「今日は病院に行く日だから、さっさと帰って来るのよ。」

と母に言われていた私は、少しよけるくらいの気持ちでそれを拾い上げると、ケースの内側に入っている学生証が目に入った。その時、私は姉の話を思い出した。姉も大学生時代に学生証と電車の定期券を落とし、ひやりとした経験がある。学生証をなくすと授業を受けられなかったり、学生生活に関わる様々なシステムの利用が停止されたりと、かなり困るようで、紛失に気づ

いた時の姉は相当焦っていたようだ。そのことを考えると、そのスマートフォンケースを放っておくことはできなかった。この学生は学生証がないことに気づいているだろうか。どこで落としか見当はつくのだろうか。私は少し離れた交番に向かって歩き出した。

交番ではおまわりさんがすぐに対応してくれ、落ちていた場所などを尋ねられた。受け答えをしながら、私は落し物を受け取って、いつも通りに大学へ通う男子学生の姿を思い浮かべ、自分までほっとした気持ちになった。姉も学生証と定期券が交番に届けられ、手元に戻ってきた。おまわりさんは落し物が『イズミ町』で拾われたということを教えてくれた。よほど嬉しかったのか、姉はそれまで知らなかった『イズミ町』の地名を覚えた。今でもその町内を通るたびに、拾ってもらった学生証と定期券を思い出すらしい。私が拾った学生証の持ち主は全く知らない相手であるが、落し物が手元に届き、安心し、喜んでくれるなら私も嬉しい。

最近のニュースで、落し物を拾った人が、持ち主に過度のお礼を要求することがあると知った。私には信じられないニュースだった。小さな落し物も、持ち主からすれば、大切な届け物になる。相手の気持ちを考えて行動した結果、温かく嬉しい気持ちでいっぱいになった。この時私は、彼ら目に見えない大切な贈り物を受け取ったのではないか。と思った。

私たちの周りには落し物があふれている。数年後には東京五輪が開催され、多くの外国人もやって来る。私たちは彼らとは言葉も文化も異なるが、落し物をして困っている相手の立場にたって考えること、これをなくしたら大変だろうと共感する気持ちは、相手がどこの人であろうと共通だ。彼らの落し物も、無事に彼らの手元に届く日本でありたい。そして私も、相手のことを考え、素直な親切心であふれる日本の一員でありたいと思う。

先輩の優しさ

御殿場市立高根中学校 二年

早野 凧音

今年の夏、私は大好きな先輩方と出るこの出来る最後の大会を迎えた。私は女子ソフトテニス部に所属している。人数の関係で、私は先輩とペアを組んでいた。私は先輩にとっては最後の大会、私が足を引っ張らないようにしよう。と心に決めていた。だから、練習や声出しを人一倍頑張った。そして、いよいよ当日。決戦の日が来た。みんなで円陣を組み、部長の、「絶対勝つぞー!」の掛け声が続いて、みんなで、「おー!」と、声を合わせた。私は、先輩を笑顔にしたい、という一心で試合に臨んだ。初戦は、お互いに落ち着き、見事勝利することが出来た。私と先輩は、「やったあ!」と声を上げて喜び、次の試合に向けて準備

を始めた。そして、二試合目。互角の状態であった。だが相手の空気のみ込まれ、あと一点で負けてしまう、という事になった。私のサーブだ。絶対入れる。という思いで力いっぱいラケットを振った。だが、サーブは入らず負けてしまった。正直、何も言葉が出なかった。ただ涙だけが流れ続けていた。私のせいで負けてしまった、という思いと、もう二度と先輩と顔を合わせられない、ラケットなんて握れない、という思いでいっぱいだった。

私は、自分達のテントに戻ったとき、先輩に、

「風音ちゃん、ちょっといい？」

と言われた。私は、合わせる顔がないまま、恐る恐る先輩のもとへ行った。すると、先輩から、私は予想外の言葉を掛けられた。

「風音ちゃん……。おつかれ！先輩とペア組むとすっごく緊張するよね。私、負けちゃったけど後悔はしてないよ。だって、風音ちゃんとペアだったんだもん。私のせいで辛い思いさせちゃってごめんね。大好きだよ。」

私は涙が止まらなかった。先輩の優しさを改めて痛感したのだ。先輩の優しさに私は救われた。

私は今、一番手として、責任者として頑張っている。もし、あの時、先輩に声を掛けられていなかったら、きっと私はテニスをやめていただろう。先輩のおかげでここまで上達出来た。だから私は、次の大会で必ず結果を残す。そして、先輩に言おうと思う。

「先輩のおかげです。ありがとうございます。」

という言葉と、

「先輩！私も大好きです！」

という言葉。

小さな親切

伊豆市立修善寺中学校 二年

藤井 尊

小さな親切について、僕なりに考えてみた。世の中では親切とされる行動がいくつ

かある。お年寄りに席を譲る、困っている人がいたら助けてあげる、友達の相談に乗ってあげる。しかしどの行動も、僕にとって心が動かされる程の印象を感じられなかった。

僕の母は持病がある。見た目では分からないが、一生治らない病気だ。何度か入院をしたこともある。ある日、母が言った言葉が今でも忘れられない。「病人扱いされるのが一番嫌だ。病気なのは仕方ないけど、普通の人と同じようにして欲しい。」僕の中で、今まで当然だと思われていた事が、そうではないのかもしれないと、常識が覆された瞬間だった。病人なのだから、親切にされることが嬉しいと勝手に思っていた。しかし本人にとっては、特別扱いされることが苦痛なのだと知った。

親切にされることが特別扱いと受け取る人も居るのだ。そうだとしたら、親切とは悪いことなのだろうか。それも違う気がする。親切にされて嬉しいと感じる人も居る。それでは、嬉しいと感じられる親切とは、一体どの様なことなのか。

先日、僕は定期券を紛失した。通学で使用しているの、無いと分かった時には目の前が真っ暗になった。半年分の定期券で、まだ一ヶ月しか使っていないから、目の前が真っ暗になったという表現は決して大げさではない。電車のホームや通学路、駅員さんと一緒に電車のイスを上げて探したが見つからなかった。次の日、学校で担任の先生が僕の定期券を渡してくれた。聞けば、僕の先輩が拾って、学校に届けてくれたのだ。僕は安堵し、先輩のご自宅にお礼を伝えに伺った。すると先輩のお母さんが、「当たり前のことをしただけなので。」と仰った。僕はその時、目の前の霧がすつと無くなって、晴れた気分になった。親切とは、ごく自然に行うことで、見返りを求めたり、恩着せがましくしたり、自己満足に浸ることはないと理解した。

世の中が、『人に親切にしましょう。』と、キャッチコピーのように言っているようでは、住みやすい世の中、優しさにあふれた世の中にはなれないと思う。なぜなら親切とは、当たり前のことなのだから。お年寄

りに席を譲る、困っている人がいたら助けてあげる、友達の相談に乗ってあげることを、当たり前に出る世の中になったら、親切という言葉が無くなるのではないだろうか。思いやりの心を一人一人が持てたら、困っている人に対して親切にするのが当然なことだと定着した世の中になれば、あえて親切という言葉を使わなくても、それはごく自然なことで、皆が住みやすい温かみのあふれた世界を築くことができると思う。

もう一人の自分が見てる

静岡県立浜松西高等学校中等部 三年

堀田 早希

『どんな時も人は決して一人じゃない。もう一人の自分が自分を見てる』
人は誰かが見ていると良い人でいようとする。親切にしようとする。誰も見ていないところで、人のために働ける人はほんとういない。

しかし、本当の親切とは、人に感謝されるためのものだろうか。人に認めてもらうため、感謝されるための行動は親切と言えるのだろうか。それが親切と言えないとしたら、本当の親切とは何なのか。私はこう思う。誰かの役に立つ行動を、自分から誰も見ていなくてもできること。目的は自分のためではなく他人（ひと）のため。

でも、私だってそんな行動ができていない。人の役に立つことをすれば、すぐに見返りを求めてしまう。「ありがとう」「さすがだわ」こんな言葉をかけてもらいたいと思ってしまう。だから、何かしてあげて相手から言葉がないと損した気分になる。

そんな私の考えを変えてくれたのは、部の練習試合だ。練習試合では、空いている人を見つけてどんどん試合をする。みんなたくさん試合をしたいから、審判に入る人はほとんどいない。それに、試合に集中すると審判は目にも入らなくなるから、感謝されずに終わってしまうことも多い。そんな審判に進んで入っている選手が相手

チームにいた。その選手はエース的な存在でとても強いのに、さっと審判に入っていた。私はその姿を見て、純粹に他人のために行動できるってかっこいい。と思った。私も、他人のために行動したいと感じた。

その日から私は、少しずつ他人のためを考えられるようになってきた。配布物があったら、みんなの邪魔にならないような時に自分から分ける、などである。しかし、やっぱり人に認められたいと思う時もある。そんな時は、自分の中の自分に褒めてもらうようにしている。おかしいと思われるかもしれないが、自分の行動はもう一人の自分が必ず見ている。良いことをすれば自分が認めてくれる。それで充分ではないか。

私はこれからもっと親切な人になっていきたい。自分のためではなく他人のために働ける、そんな人間を目指したい。他人のためは大変かもしれないが、どんな時でももう一人の自分が自分を見ているから。いつでも親切に生きたい。

親切

富士宮市立富士宮第一中学校 三年

前林 茉奈花

カシャンと音をたてて、筆箱が落ちた。隣の席の子の物だ。

私は今、夏休みという中学三年生にとって、とても大事な長期休みをむかえていた。それまでは特に塾に行くわけでもなく、家で個人的に勉強をしていたが、友人のすすめと親からの説得で夏期講習に通うことになった。私自身も、この夏休みは勉強中心にしたいと思っていたので、塾が嫌なわけでもなかった。しかし、私のこの性格ではどうしても浮いてしまっていた。どうしよう、拾おうかな。でもめいわくかもしれないし……。そう思いながら落ちた筆箱に手を伸ばしたが、その手が筆箱や散らばったシャープペンに届くことはなく、すぐに私の前の席の子が立ち上がって、筆箱を落としてしまった子と一緒に散らばった物を拾い始めた。

私は、引っ込み思案な性格だ。むこうから来てくれれば話せるけど、自分から行くことはできない。誰か来てくれないかな。いつも待っているばかりで、塾の同じクラスに何人か同じ学校の子はいるが、特に会話を交わすこともなく、私はいつも一人でいる。ああ、浮いてるんだろうな。とマインナスなことばかり考えてしまうくせもある。だから、親切をする前にめいわくじゃないかと考えてしまっただけで、結局いつも私の手は届かないままだった。

『小さな親切大きなお世話』という言葉を目にしたことがある。その言葉がいつも私の手を止めてしまう。だから、いつも周りを見て、すぐに助ける子のことを本当にすごいと思うし、そういうふうになりたいたとは思っている。でも、誰にも声をかけられず、ただなりたいと思っただけのばかりだった。

その日も、塾だった。もう通うのも五回めくらいで、なれていてもいいはずなのに、相変わらず休み時間は一人だし、声をかけることもかけられることもなかった。だけ

ど、その日の帰り、バッグを机の上におこうとした時に、私の筆箱が落ちて、中のペンなどがあちこちに散らばった。

「あ、ごめんなさい。」

下を向きながらそう言って、一人でペンを拾っていると、隣で誰かが一緒に拾ってくれていた。

「筆箱、落ちるとあちこちにペン散らばって大変だね。私もよく落とすよ。」

その子は、隣の席の子だった。

「あ……、ありがとう。」

私は、この前拾ってあげられなかったのにな、と申し訳ない気持ちでいっぱいだった。だけど、一つ分かったのは、『小さな親切大きなお世話』あれは、嘘だと思っただ。私は一緒に拾ってくれてすごいうれしかったし、私もいろんな人に親切をしたいと思ったから。

あの言葉が嘘だと分かった今、少しずつでいいから、いろんな人に声をかけられるようになりたいと思った。

親切の木

静岡市立安東中学校 三年

馬淵 花奈

私は、陸上部に所属しています。その陸上の県大会で、エコパスタジアムに行きました。エコパスタジアムはとても広く、その日は県大会だったため、多くの人が訪れていました。そんな中で私が、一人で歩いているときに起こった話です。「迷子になっていた女の子を助けた。」というありきたりで、言ってしまうとすぐ終わる話です。けれど、私はこの体験をしたことで、大きなショックを受けると同時に、それと同じくらい大きなことを感じました。その大きなショックというのは、二つあります。一つ目は、多くの人が歩いているにもかかわらず、泣いている女の子に声をかけなかったことです。「えっ。なんで泣いているの。」という顔をしているのに、聞いてあげずに通りすぎて行ったり、目の前にいるのに、気づかないふりをしている人もい

ました。多くの人がいるのに、誰も助けてあげようとしません。いえ、逆なのかも知れませんが、多くの人がいるからこそ、「誰かが助けてくれるだろう。」と、無責任なことを考えているのでしょうか。でも、実際に私も一瞬そのような考えが頭をよぎりました。けれど、こんなに泣いている子を放っておくことに罪悪感を感じ、後で自分が後悔することになる。と思いました。それに、将来の夢が保育士というのに、通りすぎるということは、目指す資格もないと思えました。そこで私は、

「大丈夫？迷子になっちゃったの？」

と、話しかけてみました。女の子は、少し驚いた様子でしたが、泣きやむと、

「うん。」

と、一言だけつぶやくように言いました。

私が、女の子の名前や、誰といつしよに来たのかを尋ねて捜しました。そして、女の子の父親は見つかったのですが、そこで二つ目のショックなことが起こりました。女の子の父親は、私に知らん顔をしました。怒りというよりも、疑問が沸き上がってきた

ました。確かに、頼まれてやったわけでは
ないので、お礼を言われなくても当然なの
かも知れません。けれど、感謝の心を持つ
ことは大切だと思います。

物事は、連鎖の連続です。親切もその一
つであり、それは、一本の木になっている
と考えられます。誰かを助けることで感謝
され、また助けようと思い、助けられた人
も、自分が今度は助けようと思います。こ
のように、一つの小さな親切が枝分かれし
ていき、たくさんの大きな親切へと成長し
ていくのです。だから、親切の連鎖がと
ぎれぬように絶えず、枝分かれしていかな
ければならないのです。もしも、私の体験
のように連鎖が止まってしまっていたのな
ら、私から、あなたから、また一本の大き
な木となるように、芽をださなければなら
ないのです。

人を好きであること

静岡市立清水第七中学校 一年

見機 羅良

私の母方の七十一さいになる祖母は、『ふくじゅそう』というボランティア団体の一員だ。『ふくじゅそう』では、一人暮らしのお年寄りに向けた食事を、月に一度行っている。私が祖母のところへ遊びに行ったときにも、祖母は『ふくじゅそう』の食事を盛り上げていた。私も手伝いで参加して、お年寄りの方と話した。でも、知らない人と話すので、きん張ってしまった。それに対して祖母は、誰に対しても笑顔で、積極的に話していた。なんでこんなに積極的なんだろう、と私は思った。年が私よりも近いからかな。でも、私は年が近い人と話すときも、きん張しちゃうもんなあ。結局、おばあちゃんの人柄がいいってことか。私は、そう考えた。食事が終わり、『ふくじゅそう』で祖母といっしょ

に活動している人が、あいさつしてくれた。そのときに、

「羅良ちゃんのおばあちゃんにはいつもお世話になってるよ。」

「佐藤さんは、ほんとすごい人だよ。」

と言って頂いた。つまり祖母は、まわりからも信らいされているのだ。「私も、祖母のような人になりたい。」そう思って、祖母に電話で質問を二つしてみた。質問の一つ目は、「積極的に、笑顔でお年寄りに話しかけていたのはなぜか。」答えは、「ひきこもりがちなお年寄りの人達を楽しませる、笑顔にするため。」確かに、祖母が話しかけていたお年寄りの方は、みんな楽しそうだった。質問の二つ目は、「食事会の計画を立てるときに、気を付けていることは。」答えは三つあり、一つ目は、「料理はやわらかく。」お年寄りの方は、かたい物は食べられないからだ。二つ目は、「一人暮らしでは作らないような、手のこんだ料理をメニューに入れる。」『ふくじゅそう』の食事会の対象は、一人暮らしのお年寄り。だから、危なくて家では作れない天ぷらな

どの揚げ物や、フルーツサンドなどの、材料が多くて作るのが大変なものをメニューに入れると喜んでくれるそうだ。三つ目は、「また来ようと思わせる工夫をする。」食事会のとき、食事の後に毎回歌を歌う時間がある。そのとき一番最後に歌うのが、「しあわせなら手をたたこう」。この歌の最後に、「しあわせなら手をつなごう」と歌い、みんなで手をつなぐ。そして、「また来月も会いましょう。」と言って食事会が終わるそうだ。

祖母は、他にも様々なボランティアをしている。これらは全て、「人が好きだから」やっているそうだ。そして、ボランティアをやるときに大切なことは「相手に対して、同じ目線で対応すること」だそうだ。

祖母は、一人暮らしのお年寄りの目線で食事会を計画、実行している。そして、積極的に行動する祖母は、周りからも信らわれている。このような祖母を持つていることは、私のじまんだ。そして私も祖母のように、何事にも挑戦し、人が好きな人間になりたい。

ホームステイで学んだ親切

富士宮市立富士宮第一中学校 二年

森 心春

相手のために何かをする、喜んでもらえる行動をする、これが私の考えていた親切です。

合格。オーディションを受けた二週間後、私の家にうれしい知らせがやってきました。そしてこの夏休み、ニュージラードでホームステイを体験することが決まりました。

私は、今回の体験をこれからの生活に生かすために、積極的に行動し、異国の生活や文化の違いをたくさん発見するという目標を立てました。初めてのホームステイで、とてもワクワクした気持ちで荷づくりをはじめました。

その一方で、不安なことも少しずつ出てきました。ホストファミリーと仲よくなれるだろうか、しっかり生活になじめるのだろうか、そして、何より英語でコミュニケーション

ションがとれるのか、という心配が次々に出てきました。私は、英語を学ぶことが好きです。しかし、まだまだ分からない言葉だらけで英語に自信がありません。

そんな不安を抱えたまま、出発の日となりました。家族が見えなくなるまで手を振り続け、市役所を後にしました。

「五二」

不安も忘れるような笑顔で、ホストファミリーは私たちをあたたかく迎えてくれました。そんなホストファミリーと生活する中で感じたことが二つあります。

一つ目は、相手の気持ちを考えて行動している人が多いということです。私のお世話になった家には、十歳と八歳の女の子がいました。二人とはすぐに仲よくなれました。なぜ、言葉もあまり通じないのに仲よくなれたのかを考えてみました。私の考えた理由は、私たちが英語を聞き、理解しようとするのももちろん、女の子たちが私たちのカタコトの英語を分かるうとしてくれたからだだと思います。お互いの考えや気持ちがあまく伝わらなくても、そこで終わら

ず理解しようとする気持ちが大げななんだということを学びました。

二つ目は、「こんにちは。」「ありがとうございます。」

「ごめんね。」という言葉を大切にしているということ。学校では、先生だけでなく、保護者や生徒などたくさんの人とあいさつをしました。何かをとってもらう、やってもらったときは、どんな小さなことでもありがとうございますと言っていました。これらを見て、日本との違いも発見しました。例えば、あいさつ一つでも、一度立ち止まり相手の目を見て、笑顔ですということ。す。

今回のホームステイをふり返ってみると、いつも私の周りには優しくしてくれて、気持ちの良いあいさつをしてくれる、あたたかい人ばかりだったと思います。そんな人々と関わり、たくさんの方を学んだ、とても充実したホームステイになりました。

日本に帰ってきた今、私の考える親切とは、相手のことを思いやり、その人だけでなく、自分も喜びを感じられるようなことだと思えます。どんな小さなことでも、ど

んな相手に対しても、私は親切な人になりたいです。

親切への問い

静岡市立安東中学校 一年

山岡 千紗

「親切」とは何だろうか。困っている人を助けることなのか。それとも、人に対して優しさや思いやりを持って接することなのか。しかし、困っている人を前にした時、本当にそのように動くことが出来るだろうか。

私は小学校四年生の時に、駅で見知らぬおばあさんに声をかけられたことがある。その日は家族で出かける予定があり、駅の切符売り場に並んでいた。その時、背後から急に声をかけられた。

「名古屋方面行きの電車の来るホームはどこですか。」

その声に驚いて振り返ると、おばあさんと付き添いらしい女の人がいた。そのおば

あさんは杖をついていて、目が不自由だった。父は、もう切符を買いホームへ向かっていた。母は、妹と一緒に前の方に並んでいる。周りに通行人が何人かいたが、皆急いでいるらしく、どの大人も足早に通り過ぎていってしまう。私は、まだ四年生で、余り電車を利用することがなかった。もちろんホームがどこにあるか、という駅の地理など把握していなかった。

(どうしよう。)

何も答えることの出来ない私を、おばあさんと女の人は少し心配の混じったような顔で見つめている。先に改札を通っていた家族は、ホームへ続く通路で待っている。結局、私は、

「すみません。よく分からないので。」と口早に伝え、逃げるようにその場を去ってしまった。

小学校でも中学校でも、道徳の授業が週一回程度あり、社会で生きていく上で、大切なことや公共の物に対しての接し方、思いやりの精神などを学ぶ。だから、「困っている人に対して親切にする」ということは

皆が知っている。しかし、それを実行に移すことが出来るのは皆ではない。なぜだろうか。それは「親切」というものが、実はとても難しいことだからだ。困っている人に声をかけるのは、とても勇気がいることだ。相手は本当に助けを求めているのだろうか。「親切」は「お節介」と隣り合わせだ。自分に悪気は無くても、その親切の中に少しでも自己満足があれば、相手を不快にさせてしまうかもしれないからだ。その点、声をかけられる場合は相手が助けを求めていることは明白だ。しかし、自分から声をかけるのではないので、自分では対応することが出来ない時もある。でも、そんな時に以前の私のように立ち去るだけではなく、何かすることが出来るのではないだろうか。私の場合だったら、自分で案内出来ない状況でも、窓口にいた駅員に声をかける位なら出来たはずだ。

困っている人がいると関わるのは面倒だと言いたげに、わざわざ遠まきしながら道を歩いている人は沢山いる。けれど、私が何もすることが出来なかったのは「子供

だから」ではない。

何歳になっても、どんな人にとっても「親切」は難しいものだ。だから、各自が親切とは何かと考え、問わねばならない。

「あなたにとって親切とは何ですか。」

そう問われた時に、答えられるような大人に私はなりたい。

